ナスの天敵温存植物(オクラ)を植えて
環境にやさしい農業を実践しましょう！

ＪＡ京都中央
京都府京都乙訓農業改良普及センター

○　インセクタリープランツとは？

天敵温存植物とも呼ばれ、天敵を誘引し、そのすみかとなる植物のことです。これを導入することにより、天敵が定着・増殖し、害虫の発生が抑えられます。京都市、乙訓地域の露地ナス栽培では、すでにインセクタリープランツであるソルゴーの障壁栽培が、広く普及しています。

○　オクラをナスほ場に植える効果

オクラの茎や葉、花には、「真珠体」と呼ばれる透明な粒が分泌されます。真珠体には糖やアミノ酸などが含まれており、ナスの害虫（アザミウマ等）の天敵であるヒメハナカメムシがこれをエサとして、定着・増殖します（図１）。
オクラとソルゴー障壁を併用すると、多様な土着天敵が定着するため、害虫の発生を抑えるのに大変効果的です。

○　オクラの導入例

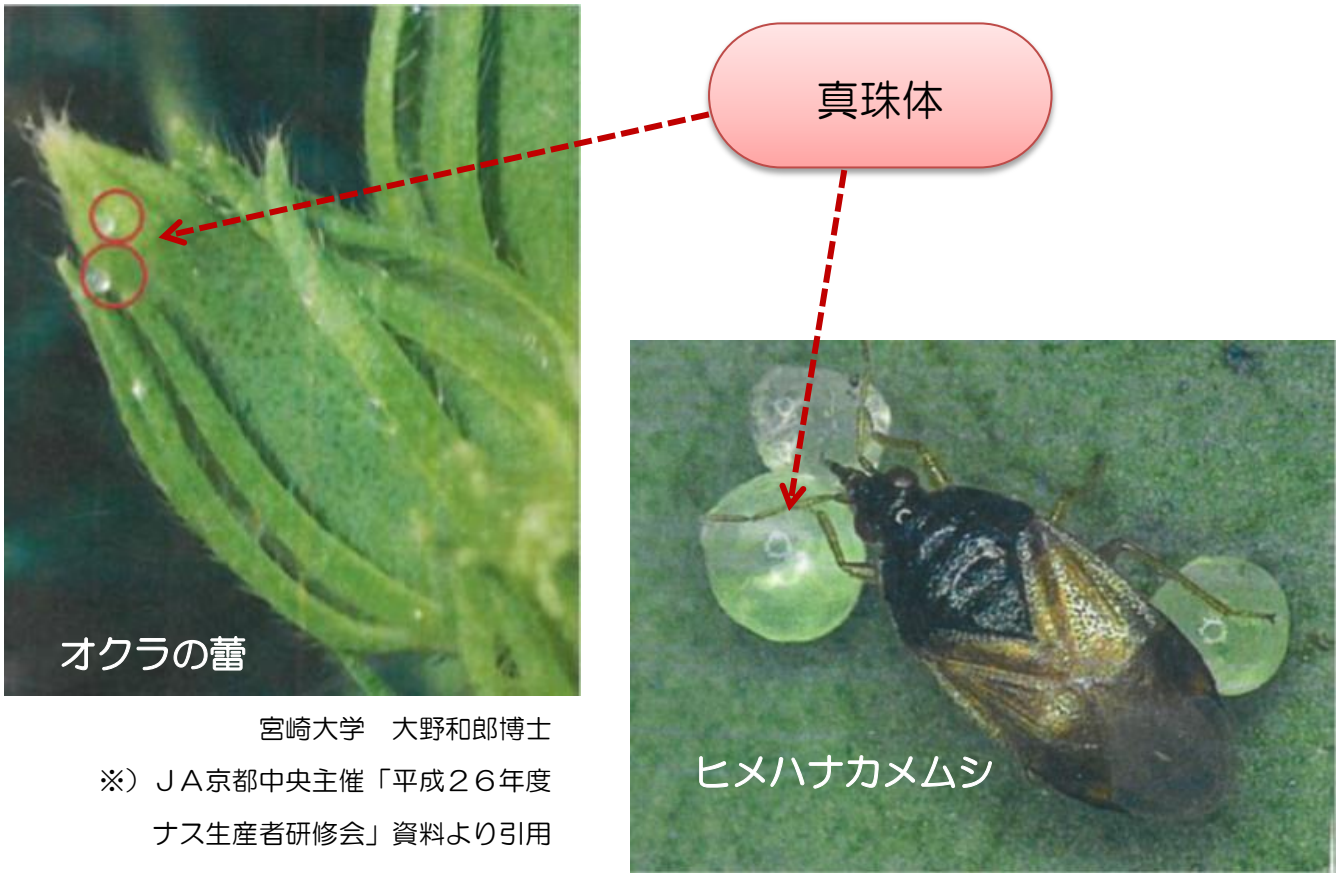
オクラを導入する場合、ナスの株数の５～１０％の株数が必要です。基本的に、オクラはソルゴーの内側に植えます。

○　ナスほ場での天敵ヒメハナカメムシの定着

昨年度、JA 京都中央管内で初の取り組みとして、１ほ場あたりオクラ１０株を栽培してもらいました。
ナスの葉や花にいるヒメハナカメムシの数を調査したところ、気温が高くなる７月以降、多くなることがわかりました。また、オクラの栽培株数が多いほ場では、ヒメハナカメムシが多い傾向でした。

○　天敵を維持するために

天敵は一度定着しても、薬剤散布により、数が減少したり全滅したりすることがあります。薬剤散布時には、天敵に影響が少ない薬剤を選択しましょう。



宮崎大学　大野和郎博士

※）ＪＡ京都中央主催「平成２６年度ナス生産者研修会」資料より引用

図１　オクラの真珠体に集まる天敵のヒメハナカメムシ

長岡京市ほ場

図２　ナスほ場の周りを囲むオクラとソルゴー障壁